219 発明王「真崎照郷」の技術遺産調査

—第1報. 照郷の生涯と発明—

A field survey of existing historical machines invented by Terusato MASAKI
be called as the king of inventors born in Saga.

—1st report on the achievement of Terusato MASAKI—

野口恭弘 (真崎照郷研究家) 池森 寛 (西日本工大) 吉村正美 (吉村麵機) 真崎精治 (新生工業)

Yasuhiro NOGUCHI (Local historian on T.MASAKI) Hiroshi IKEMORI (Nishinippon Inst. of Tech.)

Masami YOSHIMURA (Yoshimura Ironworks) Seiji MASAKI (SHINSEIKOYO.CO.)

Key Words: Terusato MASAKI, Inventor, Japanese Noodle-making machine, Saga, History of Technology

1. はじめに

明治から大正にかけて、製麺機械による製麺業界の近代化に大きく貢献した人物に佐賀の真崎照郷 (マサキ・テルサト 1851-1927) がいる。彼は明治21年に日本初の製麺機の特許を取り、その後も研究を重ね、特許は29件に及んだ。真崎式製麺機は全国で広く使われ、その原理は現在の製麺機の中にも生かされている。また佐賀平野のクリーク灌漑に適したポンプなどの発明も行い、佐賀の発明王と呼ばれた。しかし、現在ではその存在は地元でも希薄となりつつあり、佐賀が誇るこの発明家を再発見・顕彰するべく、彼が残した上記の機械類の遺産調査を行っている。本報告はその第1報である。

2 調査研究の経緯

筆者の一人、野口は真崎と同郷の生まれで、小学校時代 (昭和30年代) 校内に飾られていた真崎照郷など地元の偉人の絵の下で礼をするような教育を受け、また近くにあった真崎の記念碑を見て育ち、真崎への尊敬の気持ちが心の中に芽生えていた。数年前に定年を迎える頃、地域活動で代々製麺機の切り刃の加工をしていた吉村と知り合い、これらが縁で地元の偉人である真崎の業績を何とか後世に伝えようと吉村氏と共同で製麺機や灌漑ポンプの調査を始めた。

この頃の池森も明治期に多くの特許をとり今日に通じる製麺機械の開発に尽力した発明家・真崎に興味をもち資料収集を開始していた。運よく佐賀の地方紙に掲載された野口の記事を読み、同志を得て地元の野口らに加え、照郷の孫である真崎精治の協力も得て真崎関連の技術遺産の調査が始まった。現在佐賀県内の製麺機の悉皆調査がほぼ終わり、これから調査結果の分析を行おうとしている。この報告は、真崎照郷の生涯と調査の一部について触れる。

2. 真崎照郷の小史

いくつかの文献¹⁾²⁾を参考に真崎照郷の生涯を調べると以下のようである。

照郷は、嘉永4(1851)年現在の佐賀市巨勢町に生まれる。家は造り酒屋で、6歳の時父を亡くし、教育は寺子屋で読み書きを習っただけといわれ、彼の発明の才能は生来のものであった。17歳のとき家業の酒造の研究から、酒糟の浮泡から蠟が取れることを発見し、それまでと異なる方法で北部九州の特産であった南京櫨の蠟や櫨油を採取した。また、竹や稲藁からの紙造りも行っている。さらに、明治初期に始まった、地租改正に伴う農地の測量に、正確な測量器を考案、「真崎円度」の名で各地で使われたといわれている。

その後、明治9(1876)年25歳のとき、郷土の産業のひとつであった素麺作りに着目し、手打ちから機械化すなわち自

動化を志す。やがて綿繰り機からヒントを得て、明治10(1877)年に「真崎鉄工場」を設立。しかし研究は難航し、家業は倒産、狂人呼ばわれしなから、苦節6年ようやく完成。しかし、莫大な費用がかかり、資産や田畑も手放す状態となった。発明したものの製作販売資金はなかった。特許も当時は確立されておらず、取得に3年を要し、明治21(1888)年最初の特許「麵類製造器械」を取得、これが日本初の製麺機の特許となった。図3はその特許明細書の図である。我が国の工業製品の特許では四番目に当たる。その後、機械の欠点を改良、その間職工のアイデア盗用などもあったが、明治29(1896)年改良型の特許を取得。図2は初期の真崎式製麺機。その後、真崎式製麺機は製麺業界へ大きな革命を起こすことになった。

郷土の神埼地方では、すばやくこの機械を取り入れた。また日清戦争後は全国で需要が高まり、東京などの支店はもち

図1 真崎照郷

第一

図2 初期の手回し真崎式製麺機

第二

第三

図3 最初の特許第448号明細書 (明治21年) の図版

ろん、中国や朝鮮にも支店を設け販路を拡大し、世界にも名が知られた。照郷の製麺機研究はその後留まることなく、大正10(1921)年までに製麺機関係の特許を29件取得、第五回内国勲業博覧会など各地の博覧会でも60件以上の賞を受賞した。1907年には藍綬褒章、1923年の発明博覧会では、田熊ボイラや豊田織機とともに大賞を受賞している。

大正半ば、製麺機事業が本格化してくる時期に、電機とポンプという新しい事業に取り組み始める。これらの事業は佐賀の特殊な灌漑事業に結びついてゆく。1918(大正7)年には電気部門の「日本電機鉄工」としての独立などもあったが昭和52(1977)年に終焉を迎える。この間の歴史は、第2報に述べることにする。

真崎は晩年には、大正天皇から発明奨励金が下賜、さらに大正15年には生誕地の巨勢神社の傍に、図5の真崎照郷翁記念碑が建てられたりして、その功績が称えられる。しかし昭和2(1927)年病気のため77歳で亡くなる。

照郷は熱心な仏教徒で、座禅を組み感覚を研ぎ澄まし、ひらめきを得ていたとも言われ、家訓としては「因果の断りを極めよ」を残している。

3. 真崎の技術遺産の調査状況

真崎式製麺機械は全国に販売され各地で使用されていたが、佐賀にはそうめん産地として有名な神崎町もあり、手始めに、小規模な地元佐賀県内の製麺所の悉皆調査を行った。県内には55軒製麺所が存在。現在も真崎式製麺機を使用している製麺所が7軒あることが分った。製造年の特定はこ

表1 現存・稼働する真崎式製麺機

	所有者	住 所	製作年	状況
1	吉村正美	佐賀市巨勢町牛島	明治期	一部保存
2	〃	同上	昭和初期	一部保存
3	〃	同上	昭和中期	一部保存
4	藤満食品製麺工場	神埼市千代田町	昭和初期	稼働
5	古川製麺所	武雄市武雄町	昭和初期	中止
6	筒井製麺所	嬉野市塩田町	昭和初期	稼働
7	青木製麺所	嬉野市嬉野町	昭和中期	稼働
8	坂本製麺所	佐賀市高木瀬東	昭和中期	稼働
9	坂本製麺所	佐賀市高木瀬東	昭和中期	稼働
10	大坪製麺所	佐賀市東佐賀町	昭和後期	稼働

図5 真崎照郷翁記念碑

図6 小学校に展示の製麺機

図7 傾斜型灌漑ポンプ

れからであるが、昭和初期のものが3件、中期のものが2件、後期のものが1件であった。

また、前述の吉村が、機械の一部であるが時代の異なる3台の製麺機を保存しており、中には明治期の物のもあった。

表1は残存する製麺機をまとめたものである。また図4は表1中の番号4と5の製麺機の写真である。なお吉村の3台は現在で、図6のように子供たちの社会・理科教育のために地元の巨勢小学校に展示(吉村氏寄託)されている。

灌漑用ポンプは、現在地元で稼働している1台と、図8のように保存中の物が1台あるが、調査継続中である。また、青年期の発明の木炭資料や測量器については不詳である。

4. 最期に

本報告は、現在進行中の佐賀の発明王といわれた真崎照郷に係わる産業遺産調査の最初の報告として、製麺機作りに一生をかけた真崎鉄工場時代の概略史と、製麺機の現存調査の途中経過を述べた。製麺機については予想以上に残り、まだ稼働していることが分った。調査した小規模地場企業では生産量が一定で、このため機械の更新は少なく、大切に使われたこと、また切り刃加工職人の存在などがあったと思われる。

次報では、製麺機の変遷について報告する予定である。

現在本屋に並ぶコミックエッセイ、見ル野栄二著『シブすぎ技術に男泣き』中経出版(2010)では、日本のものづくりを支えた男「製麺機の生みの親の苦節」として真崎が紹介されている。図8はその一部であるが、偶然といえ、この本も真崎照郷を例に技術史研究の大切な目標である技術と人(技術者)との係わりを学ぶことの重要性を発信している。

文献:1)巨勢尋常小学校『発明家 真崎照郷翁』(昭和9)

2)「真崎照郷」JR情報誌プリーズ、No.246(2007)他

図4 現存する真崎式製麺機械の例

発明の源は座禅と母心！製麺機生みの親の苦節に男泣き／Tech総研

図8 「シブすぎ技術に男泣き」から